時代を担う、実力を兼ね備えた組織

保科幸二 NPO法人砂防広報センター理事長

財団法人といえば、今では誰からも、国や県が認可する団体であり、その社会的役割や位置付けを名実ともに正しく理解される組織となっています。30年前、財団法人砂防・地すべり技術センター（STC）が発足した年の前後、私は、昭和49年から3年間ほど、STCよりひと足早く設立された直後の、同じ建設大臣認可の財団法人国土開発技術研究センター（現 国土技術研究センター）に出向し籍を置いていました。

当時は建設省が認可する外郭団体という認識は一般に浸透しておらず、国や県の関係者の間でも、ほとんどの人はその存在を知りませんでした。従って、理事長以下財団法人の職員は、民間と全く変わらない経験をしたものです。建設省の直轄事務所の職員と、請け負った業務の打ち合わせをした時、椅子を勧められることもなく立ったまま話をするという経験などは、いまだに記憶に新しいことです。

立場変わればではありませんが、甲（発注者）と乙（受注者）の立場がどんなに違うものであるかを思い知らされたものでした。経営上必要な受注量を確保することを重要な要素として考慮する必要があるかないかの違いが、根本的に甲と乙の立場を、さらには諸々の価値観までも異なったものにしていることを、身をもって、このとき学んだと思います。今でも、社員の給料の資金繰りや、資金には利息がかかることなどに無頓着でいられる甲の対応に対して、強い憤りを覚えることがあります。

●

そんな屈辱とも言える思いを、いろいろ味わうことはありましたが、また一方同時に、民間の気楽さや楽しさも享受したものです。例えば、仕事に関していえば、発注相手の担当者が了解してくれさえすれば、それで仕事は終わったようなものでしたから、役所にいた時のように関係部署をあちこち持ちまわって、了解を取り付けるまで何度も手直しを重ねるという、大変厄介な手間のかかる作業から開放されて、単純明快で分かりやすい仕事を、楽しく進めることができたように思います。

たまに、シンクタンクとして、権威を意識したような内部チェックが厳しくあり、発注者よりも内部の了解を得ることがなかなか難しいということもあって、いかにもセンターらしいできごととして印象に残っています。

また、契約に関しては、今も同じですが、全て随意契約で、私の場合で平均1000万円程度の物件を7～8本受け持ちました。が、自分一人で、前書きから後書きまで直接目を通すことができるのは、せいぜい3本が限界だということも知りました。工期が迫る2月、3月の年度末ともなると決まって徹夜が続いたものでした。

自分が稼いでいるという認識も強くあり、たいした仕事もしないで高い給料をとっている居候のような人に対する批判精神も旺盛でした。若かったことが思い起こされます。

経理は独立採算のようなものでしたので、自分で実行予算を組んで、その中で自由に経費を使わせてもらったことなどは、今では考えられない楽しく懐しい思い出です。

●

その後、多くの財団法人が立て続けに設立されて、誰もがその存在を知るようになり、またその役割も明確になってきました。私がSTCにお世話になったのは、平成11年4月から1年半ほどの間でしたが、プロパーの職員も増えて、大変しっかりした組織になっていました。

今日では、どこの財団法人も優秀な人材を擁し、高度な技術解析と分析を自ら行う実力を持ち、関連するさまざまな課題に取り組み、また必要な調査研究を継続的に積み重ねられています。問題解決に当たっては、適切な判断と結論を導くなど、まさに頭脳集団として、官庁はじめ関係の機関から高く評価され、また信頼されており、その実力を遺憾なく発揮されています。

STCが現在の地位を確立するまでの道が平坦でなかったことも事実であります。特に発足当初は少ない人数で、基本的な経営方針を定めることにいろいろご苦労されていたことを覚えています。国土開発技術研究センターにいた私のところにも経営状況をのぞきにお見えになったことを思い出します。現役の出向者がいない代わりに、頼りになるプロパーが育つ仕組みを持つに至ったことは、いろいろな意味で特筆されると思います。

●

今、私は砂防広報センターの理事長として、まさに少ない職員で広報業務を請け負っていますが、業務案件は、待って与えられる時代から攻めて取ってくる時代へと大きく経営環境が変化してきています。時代を見据えての的確な広報企画を提案できる総合的な技術力を備えた人材の育成が要であると、身にしみて感じています。STCのように実力を兼ね備えた組織となることを目指したいと考えています。

時代は、今大きく変貌する途上にあると言えます。STCが担う役割は、ますます大きく、かつ重くなるばかりです。STCが示される判断が与える社会的影響もその比を高めてきています。時代を担い続けるSTCの活躍を期待申し上げますとともに、ますますの発展を心よりお祈り申し上げる次第です。

（元当センター理事、平成11年4月～12年9月在職）